

7. 黒毛和種未経産牛に発生した顆粒膜細胞腫を疑う症例

大分家畜保健衛生所

○岡田彰三・中西年治・池堂萌果・病鑑 大木万由子

【はじめに】

顆粒膜細胞腫(GCT)は牛の卵巢腫瘍のうち最も発生頻度が高く、すべての年齢に発生している。一般に片側性に巨大腫瘍を作り、多数の嚢胞を形成するものと充実した腫瘍を形成するものがあり、反側側の卵巢は萎縮することが多い。臨床症状は、異常発情を示すものと無発情のものがあり、内科療法に反応しない。腫瘍化した卵巢の摘出により生殖機能が回復する例が報告されている。

今回、2020年5月にGCTを疑い、摘出手術を行った症例について概要を報告する。

【発生概要】

黒毛和種40頭規模の繁殖農場にて、2020年4月以前から15ヶ月齢の未経産牛に無発情、排尿異常の症状が発生、診療獣医師による診察の結果、腹腔内に巨大腫瘍を認めたことから当所へ検査依頼。同年5月11日の繁殖巡回時、直腸検査と超音波検査で左卵巢の腫張、大小多数の嚢胞状構造(honeycomb:蜂の巣状)及び右卵巢の静止を確認。これらの所見からGCTと診断。同月25日に左卵巢を摘出し、病理組織学的検査を実施。翌26日に当該牛が死亡したため、病性鑑定を実施。

【成績】

摘出された卵巢は15cm×10cm×10cm大、水風船様に柔らかく、嚢胞内には暗赤色の液体が貯留。病理組織学的検査では、卵巢実質は正常組織構造に類似し、卵巢表層は線維性結合組織の増生により肥厚がみられたが、腫瘍細胞の増殖は認められず。剖検では腹腔内に大量の血液の貯留がみられたが、出血部位の特定には至らず。細菌学的検査では各主要臓器からの菌分離陰性。以上から左卵巢は「多発性の過大卵胞形成」、死因は「腹腔内大量出血による出血性ショック」と診断。

【まとめ及び考察】

本症例では、GCTと診断し摘出された卵巢での腫瘍細胞の増殖が認められなかった。

既報において、本症例と同様の病理学的所見が認められたGCTでは、診断に用いた特異的ホルモンが摘出までの期間に減少していたことから、腫瘍細胞の自然退縮が生じたと考察されている。

今後、同様の腫瘍を伴う症例に遭遇した際は、臨床症状、内科療法の有無、超音波検査に特異的ホルモン測定を加えた診断を行い、経済性と手術リスクを考慮した上で、摘出または廃用の提案をしていきたい。